

11月1日(土)ゼミは開催します**2026年の年会費について**

現在の会員数は58名です。2026年の年会費**5千円**の振り込みをお願いします。尚、下記2名の会員は、既に年会費を入金済みですので振り込みは不要です。

尚、「**古代史ニュース郵送**」会員の方は本年同様に、別途**2千円**方ご負担をお願いします。尚、当会古代史ニュースは**HPにも掲載中**です。印刷も可能です。

- 1、振込銀行：三井住友銀行 飯田橋支店
普通口座 6355550 古代史教養講座
- 2、入金済み会員（敬称略）
坂元洋子会員。野田富士子会員。
以上。

九州王国(倭国)、出雲王国、大和王国の盛衰

—11月1日ゼミ紹介文・増田修作会員記—

1. テーマ選択の理由

日本国の成立には九州、出雲、大和三王国が深く関わっている。もちろんその他にも影響した王国あるいは国があったかもしれないが、それらの国々は日本統一の過程で三王国に吸収されたとみなされる。さらに三王国はほぼ同じ時期、3～4世紀にそれぞれ九州島、本州島の統一を成し遂げ、その後日本統一に向かったと考えられるが、この時代は中国史書を含め日本に関する記録がほとんどなく、空白の世紀と呼ばれる時代である。難しいテーマであるがこの三王国を同時に取り上げ、空白の世紀に隠された日本国家成立の全体像を明らかにすることに挑戦したい。以下にゼミの概要として、三王国の盛衰のポイントとなった出来事を紹介する。

2、九州王国(倭国)の盛衰＝邪馬台国の滅亡と狗奴国の倭国統一

三国志魏志東夷伝中の倭人に関する記事に依れば、倭女王・卑弥呼は前後三回魏に使者を送っているが、その第三回目の遣使の時に狗奴国と交戦中であることを報告し、魏はこれに応じて使者を派し、檄して告諭している。次いで卑弥呼の後継者壹與が位に即き魏に遣使したが、やがて魏は晋に社稷を譲ることとなった。壹與はこの王朝交代直後泰始二年(266年)に晋に朝貢しているが、この朝貢記事を最後に中国史書から倭国に関する記事は全く姿を消し、晋書の義熙九年(413年)まで何ら記載をみない。この146年間に及ぶ外国資料の空白時代こそ日本古代史上の最大盲点であり、かつ最も重要な歴史的变化が列島内部において継起していたのであるから、この期間の史実を明確にすることが日本古代史を明確にすることそのものであろう。倭国関係の中国史料が晋の泰始二年を以て消滅する理由については魏に代わった晋の事情とも考えられるが、むしろ倭国側の事情によるものと考えられるべきであろう。

即ち、卑弥呼時代よりすでに交戦状態にあった邪馬台国と狗奴国はしばしば交戦状態に入り、邪馬台国にとっては魏が倒れて晋が代わったことは極めて不利な情勢になったと思われる。壹與は泰始二年までは女王国を支配していたと認められるが、その直後から晋との通交を絶っているのは、泰始二年の遣使後いくばくもなく女王国は狗奴国との戦いの末、遂に滅ぼされたことをしているのではあるまいか。一方九州島におけるこの南北大部族国家の統一戦争が行われていた時期こそは、本州島においても大和古王朝の活

躍時期であり、大和部族国家と出雲部族国家等との統一のための征服戦争が行われていたと考えられる。そして西暦 280 年頃には統一戦争がひとまず終了し、九州島は狗奴国によって統一され、また本州島は大和以西が崇神天皇により統一されたのであろう。

こうして九州島の狗奴国は倭国統一を果たしたが、その後直ちに大和国家と抗争する余裕はなかった。その自然地理的位置から大陸、特にその頃中国の五胡十六国時代の混乱を経て、一大変動期に遭遇していた韓半島南部の統一運動の動向に敏感にならざるを得なかった九州倭国は、邪馬台国以来の半島南部の植民地の強化を必要とし、壱岐、対馬を經由して任那の計略が大和国家との抗争以上の最大の関心事であったと思われる。任那植民地の拡大を策して百済、新羅との交戦もしばしば行われたことであろう。九州国家の関心は東の大和国家よりもむしろ北の韓半島国家の帰趨に注がれねばならなかった。一方大和国家としても本州島の統一後の国内秩序の強化に集中しなければならず、九州島に侵攻する余裕などはなかった。こうして九州島では統一によってその勢力を拡充した九州倭国による韓半島侵攻が本格化することとなった。

2. 出雲王国の盛衰＝出雲国家連合の発展と饒速日王国へのリーダー交代

出雲には古くから高句麗、新羅の文化が渡来し、その影響のもとで出雲王国として発展。出雲は、その地理的環境から弥生当時、北部九州と並んで列島の表玄関であり、東出雲には高句麗系部族が、また西出雲には新羅・伽耶系部族が渡来して、夫々の文化をもたらし、その影響を強く受けたあるいは直接受容したと考えられている。

これまで出雲は神話世界だけの王国といわれてきたが、

- ・大型四隅突出型墳丘墓
- ・これまでの列島の銅剣の出土総数 300 本を上回る 358 本の銅剣の出土
- ・39 個という列島最多の銅鐸の出土
- ・列島最大の環濠集落(鳥取・妻木晩田)

など弥生時代の考古学上の大発見が最近相次ぎ、『出雲に「遠い由来と、堅い基礎と、根強い

力」を有した地方勢力が存在した。』(津田左右吉氏)ことが証明されたと言えよう。

弥生後期、出雲は日本海ルートによる鉄の供給拠点であり、その規模は九州を超えるものであったと推定されている。(「弥生時代地域別鉄器出土状況」川越哲志氏)

鉄供給によって結ばれた吉備、大和、丹波、越などの諸国と大和纏向地域を拠点に、出雲を盟主とする地域連合体政権、すなわち出雲連合国家を形成することとなったと考えられている。

出雲連合国家が本拠としたと思われる纏向周辺の三大神社、大神神社(祭神・大物主大神＝大国主神の幸魂・奇魂(社伝))、大和神社(倭大国魂大神＝大国主神あるいは大国主神の荒魂(大倭神社注進状))、石上神宮(布都御魂大神＝神剣・詔霊、布留御魂大神＝天璽十種瑞宝、布都斯魂大神＝天十握剣、いずれも出雲平定に関わる神剣、天璽十種瑞宝を祭神としている)がいずれも饒速日尊を含めて出雲系であるか、あるいはその可能性の高いことは、出雲が連合の盟主であった重要な証拠の一つであろう。

饒速日族の大和への進出については、考古遺物の発掘、饒速日を祀る神社、地名の相似などから、200 年頃(諸説ある)、親衛隊(防衛)、天物部と船頭他を従えて九州から北上し、鳥見次いで纏向地区に居住地を定めたと考えられている。饒速日族が、出雲連合に参加し、やがてその実力によって纏向を拠点とした出雲連合国家のリーダーの地位を出雲王国から奪い取ったストーリーが想定できる。出雲の国譲りの伝承のモデルとなった事件であろう。出土する銅鐸の変化、後の国造の分布、そして一部の出雲族の東国への移動などが、連合王国のリーダーの交代を示唆している。

3. 大和王国の盛衰＝婚姻政策による饒速日王国・大和王国連合の成立

大和王国は神武東征による王国建国以来大和国内の地方豪族として地盤を築いていったと思われる。そのことは日本書紀が記す当時の大和王国の婚姻政策によって窺い知ることができる。

初期大和王国天皇(もちろん当時天皇ではないが)は、大和国の有力豪族であった磯城県主、十市県主、春日県主などと婚姻関係を結ぶこと

によって大和国における勢力の拡大に努めたものであろう。しかしその結果はあくまでも大和国内の地方豪族の範囲にとどまり、全国的な勢力には及ばなかった。

その状況を一変させたのが饒速日勢力との連合であったものと思う。その始まりは孝元天皇の饒速日族(正妃・饒速日尊六世孫・鬱色謎命)との婚姻であり、それを受け継いだ開化天皇(饒速日尊六世孫・伊香色謎命)、崇神天皇(饒速日尊八世孫・御間城姫命)は饒速日勢力との連合体制の構築に成功し、連合のリーダーに擁立されて一躍大和王権樹立の道に進むことになったのではないか。大和国の地方豪族に過ぎなかった大和王権が日本統一に進み始めたきっかけとなった出来事であったのだらうと考えている

崇神天皇の事績として有名な四道將軍の派遣もそのルートを見れば、近畿、紀伊、中部、東海にまたがる饒速日勢力圏(新式(近畿式、三遠式)銅鐸の流通圏)の外縁を廻ってその勢力範囲を拡大あるいは大和王権として確定するもののように見える。

崇神天皇当時の饒速日+大和連合を示唆する例の一つであると考えている。完

ゼミ会場と時間 13:15~16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には1時頃の入場をお願いします。

歴史を歩く～虎塚古墳～

—沼田 広慶会員記—

茨城県の JR 常磐線勝田駅からひたちなか海浜鉄道湊線に乗り換えて中根駅で下車。わずか9分であった。いかにも海辺を走っている感じがする名前の電車だが左右の車窓から海は全く見えなかった。那珂湊駅まで行かないと潮の香りはしてこないようだ。

さて、駅から北東方向に伸びている道を歩く。すぐ川を越えてなおも行くと、交差点に出る。そこをまっすぐ進むと道は斜め左に曲がる。スマートフォン

のマップではすぐ近くのはずだが最短で行ける道がない。そのまま進んで今度は右にさらにまた右に曲がって歩いていくと、やっと大きな虎塚古墳の旗が立っていた。正面奥には埋蔵文化財調査センターがある。ここまで駅から約30分か。とりあえずパンフレットを頂いて虎塚古墳に向かう。センターのすぐ裏手から標識に導かれて木立の中を行くと、100mも行かないうちに目指す古墳があった。パンフレットには7世紀前半頃の築造とある。全長56.5m、高さ5.5m。前方後円墳のはずだが後円部の方から見ているので前方部が見えない。正面に古墳の中に入るための四角い入口があった。前にテーブルがあり受付の人が数人立っている。いやそれどころではない。40人程の人が古墳の脇に立っている大きなテントの中で椅子に座って順番待ちをしていたのである。センター前の駐車場から降りた人たちが走るように古墳に向かっていった理由がここでわかった。何を焦っているのだらうと思議に思っていたのだが認識不足だった。壁画の一般公開は春と秋に各10日間以内しかやっていないのだ。しかも今日は日曜日だ。甘かった。これはもう待つしかないなど覚悟を決めた。

昭和48年(1973)9月12日、未開口の石室の扉石が開かれた。そこには誰も予想していなかった壁画があった。この発見時の詳細は拙稿では省略するが、大変な驚きだったようである。センターで頂いたフリーペーパーには当時の興奮ぶりが紹介されていた。「勝田市虎塚古墳保存対策会議」では古墳の保存にあたっては公開を前提とするという基本方針が策定された。私には専門的なことは何もわからないが、石室内の温度・湿度・微生物・空気の組成などのデータをもとに古墳内に観察室を作り観察窓から壁画が見えるようにしたのである。これは凄いことだと思う。有難いことでもある。関係者の皆様の御苦勞は並大抵ではなかったであろう。心から感謝である。

マスク着用・手指消毒・見学中の私語厳禁・扉や壁などへの接触禁止等の注意を受ける。壁画は勿論、古墳内部での撮影は禁止だ。見学時間は数人のグループごとに5分くらいのような。観察窓が小さいので譲り合ってくださいとも言われた。入口では靴を脱いでスリッパに履き替えるようだ。順番が近づいてくると何だか緊張してきた。隣の女房は古

12月6日(土)ゼミ・テーマ

講師の都合で下記に変更になりました。

天智天皇の時代

—永井 輝雄会員—

2026年ゼミ(5月以降の日は予定)

- 1月11日: 古代国家の完成—齊藤 潔会員
- 2月 : 休講
- 3月7日: 万世一系の証明—土田 章夫会員
- 4月4日: 近現代史: 討論会—齊藤 潔会員
- 5月2日: 海人あま族の記紀神話—小川 孝一
朗会員
- 6月6日: 中華民族の仏教と言語—磐城 妙三郎
会員
- 7月5日: 改めて魏志倭人伝を読む—槌田 鉄男
会員
- 8月 : 休講
- 9月19: 律令制下の戸籍と家族—倉重 千穂会員
- 10月3日: ローマ帝国発展の鍵—沼田 広慶会
員
- 11月7日: 伊勢神宮論—増 田修作会員
- 12月5日: 古代ガラス—市川 達雄会員
以上。

墳を見上げているようでも虚空をにらんでいるようでもある。50分程だろうか、二人とも押し黙っていると番号を呼ばれた。「はい！」と思わず返事をして勢いよく立ちあがった。同じグループになるらしい中年の夫婦は落ち着いたもので何気なく入口に丸入っていく。スリッパに履き替えるのにもたもたしていた私は一番後ろから入った。すぐ前前室があり左隣に前室がある。そこからはやや右斜めにある観察室に入る。2m 四方形の狭さで天井も低い。背が低い私でも前かがみになる。部屋の中は暖かく湿気も少し高いようだ。まずは前の夫婦が観察窓を覗く。と、あっと声にならない声を上げた。しばらく口をあけたままだ。一体何を見たのだ。気になるが暫しの我慢だ。1~2分程で交代。いよいよ私たちの番だ。恐る恐るというか、興味津々というか。そっと窓の前に立った。

ぎょっとした。背筋が凍る。3m程先の壁に何と真っ赤な丸い輪が二つ大きく描かれているのだ。こちらをにらんでいる目のようではないか。何だ、これは。私語禁止だが、それでなくとも声が出ない。息を飲む。ミステリアスだ。呆然としていると脇にいる説明員が説明を始めた。「赤い丸は環状文と言いまして、赤色顔料のベンガラを使って描かれています。周りにも様々な絵が描かれていますね。環状文の下には細い棒のようなものがたくさん並んでいますが、これは槍や鉾を表現していると思われます。右側の壁にあるのは・・・」私は古墳の中にある壁画をガラス越しとはいえ目の前で見るのは初めてと行ってよいかもしれない。説明員の声がなかなか頭に入って行かない。私は赤い目としか思えない大きな二つの丸に圧倒されていた。見詰めていると、逆にこちらの心の中が見透かされるようである。外に出て11月初旬の冷たい外気に触れた時はほっとした気分になった。

千数百年の時を経て古代人はあの壁画で何を伝えたいのであろうか。いや、我々こそがあの壁画から何を感じ取るべきなのであろうか。歴史はロマンである。以上。